

宋康王舍人韓憑、娶妻何氏、美。康王奪之。憑怨、王囚之、論為城旦。妻密遺憑書、繆其辭曰、其雨淫淫。河大水深。日出当心。既而王得其書、以示左右、左右莫解其意。臣蘇賀對曰、其雨淫淫、言愁且思也。河大水深、不得往来也。日出当心、心有死志也。俄而憑乃自殺。其妻乃陰腐其衣。王与之登台、妻遂自投台、左右攬之、衣不中手而死。遺書於帶曰、王利其生、妾利其死。願以屍骨、賜憑合葬。王怒、弗聽。使里人埋之、冢相望也。王曰、爾夫婦相愛不已。若能使冢合一、則吾弗阻也。宿昔之間、便有大梓木生於二冢之端。旬日而大盈抱。屈体相就、根交於下、枝錯於上。又有鴛鴦、雌雄各一。恒栖樹上、晨夕不去。交頸悲鳴、音声感人。宋人哀之、遂号其木曰相思樹。相思之名、起于此也。南人謂此禽即韓憑夫婦之精魂。今睢陽有韓憑城、其歌謠至今猶存。

宋の康王の舍人韓憑は、妻の何氏を娶るに、美しく。康王之を奪ふ。憑怨むも、王之を囚へ、論じて城旦となす。妻密かに憑に書を遣り、其の辭を繆りて曰はく、其れ雨淫淫たり。河大にして水深し。日出でて心に當たる、と。既にして王其の書を得、以て左右に示すも、左右其の意を解する莫し。臣の蘇賀對へて曰はく、其れ雨淫淫とは、言ふところ愁ひ且つ思ふなり。河大にして水深しとは、往来するを得ざるなり。日出でて心に當たるは、心に死の志有るなり、と。俄かにして憑乃ち自殺す。其の妻乃ち陰かに其の衣を腐らす。王之と台に登るに、妻遂に自ら台より投じ、左右之を攬らんとするも、衣手にあたらずして死す。書を帯に遺して曰はく、王其の生を利し、妾は其の死を利す。願はくは屍骨を以て、憑に賜ひて合葬せしめよ、と。王怒りて、聽さず。里人をして之を埋むるに、冢を相望ましむ。王曰はく、爾ら夫婦相愛して已まず。若し能く冢をして合せしむれば、則ち吾も阻まざるなり、と。宿昔の間、便ち大なる梓木二冢の端に生ずる有り。旬日にして大なること抱に盈つ。体を屈して相就き、根は下に交はり、枝は上に錯はる。又た鴛鴦の、雌雄各々一有り。恒に樹上に栖み、晨夕去らず。頸を交へて悲鳴し、音声は人を感じしむ。宋の人之を哀しみ、遂に其の木を号して相思樹と曰ふ。相思の名は、此より起こるなり。南人謂ふ。此の禽は即ち韓憑夫婦の精魂なり、と。今睢陽に韓憑城有り、其の歌謠今に至るも猶ほ存す。

『搜神記』によると、韓憑夫婦の故事は「鴛鴦の契り」や「連理の枝」の下になった話である事が分かる。しかし、そこには韓憑夫婦がチョウになった話は無い。

山堂肆考卷二百二十六に“俗傳大蝴蝶必成雙，乃梁山伯、祝英台之魂，又曰韓憑夫婦之魂，皆不可曉。”李義山詩：“青陵台畔日光斜，萬古貞魂倚暮霞。莫訝韓憑為蛺蝶，等閒飛上鶯枝花。”とある。

これによると、大きなチョウ(たぶんアゲハ類)は必ず二匹一緒になって飛んでおり、梁山伯(りょうさんぱく、男)と祝英臺(しゅくえいだい、女)の魂(たましい)で、また韓憑夫婦(天上で夫婦になったと思うが、地上ではまだ夫婦ではなかったはず)の魂だと伝えられているとのことだそうである。

梁山伯、祝英台の詳しい話は探し中で、まだ見つけていない。図書館へ行けばあるだろう。でも、きっと漢文で書いてあると思う。

韓憑夫婦がチョウになるというのは、別の資料に書かれているようで、李義山(人名李商隱 約 812 年或 813 年～約 858 年，中國唐代詩人。字義山)は詩の中で「莫訝韓憑為蛺蝶」(訝ル莫カレ韓憑ノ蛺蝶トナルヲ)としている。

李義山の「青陵台」の漢詩は非常に有名な漢詩のようである。浅学を恥づ。

